

理想の女性像を追い求めて

『ダロウェイ夫人』のピーター・ウォルシュに見るアニマとの葛藤

Looking for an ideal woman: Peter Walsh's anima in *Mrs. Dalloway*

杉 澤 聡 美

序論

Virginia Woolf によって書かれた *Mrs. Dalloway* には、Peter Walsh という名のダロウェイ夫人のかつての恋人であり友人である男性が登場する。この物語の中で彼は、ダロウェイ夫人を久しぶりに訪れ、彼女への愛情はもちろんのこと、自分とは相容れない俗物的な性質に対する憎悪をもって彼女や彼女の周りの人々を観察している、一見客観的な目線をもったキャラクターである。しかし、彼の動向に注意してこの物語を読み進めていくうちに、次第に彼の中にある精神的な弱さや幼稚さが垣間見えてくることに気がついた。これを「中年男性の抱えるモラトリアムの問題、内なる異性の統合の問題」（伊藤、141）とみなすと、彼はダロウェイ夫人たちと共に過ごした青春の日々に一人取り残され、前へ進めなくなってしまった人物のように思われる。そこで、今回このピーター・ウォルシュという名の男を中心に『ダロウェイ夫人』を考察していく中で、彼の持つ精神的弱さや幼児性がどのようにして見られるのかを示し、最終的にこの物語の中で彼は精神的成長を遂げることができたのかどうかを考えていきたい。

そこで、今回このテーマで論文を進めていく際に、ピーター・ウォルシュについていくつかの気になる要素を挙げていきたいと考え

ている。

まずピーター・ウォルシュという一人の中年男性について、みていきたいと思う。そしてこの物語を語る上で欠かせない30年前のブアトンの出来事について言及していく。次に、ピーターがダロウェイ夫人に対して抱いている理想の女性像というものを導き出し、その上で彼がダロウェイ夫人に求めた女性像がどんなものかを検証していきたい。さらに、ピーターがしばしば口にする‘Death of the soul’ (Woolf, 45)「魂の死」(ウルフ、93)について考察していきたいと考えている。この「魂の死」という言葉は、ピーターがダロウェイ夫人の俗物的な生き方に対して憤りを感じた際に頻繁に出てくるものである。この言葉は、彼の過去の恋愛におけるトラウマにとらわれ、自暴自棄な気持ちになったピーターが自分の今の心理状態を思わず口にしてしまったものなのではないだろうか。そこで、ピーターがこの「魂の死」という言葉を使う理由を探し出し、そして彼の目線での魂の死とは一体どんなものなのかを示したい。

最後に、上述した内容に関連して、彼が精神的成長を遂げたのかどうかについて探っていきたいと考えている。

1. ピーター・ウォルシュの人間性と トラウマ

1-1 『ダロウェイ夫人』におけるピーター

ピーター・ウォルシュと、彼の人生においてもっとも大きな影響を与えたといっても過言ではないダロウェイ夫人との関係について、『ダロウェイ夫人』のあらすじを簡単に紹介したうえで解説したい。第一次世界大戦が終わった直後の6月、51歳になる美しい夫人クラリッサ・ダロウェイは、その日パーティを開くことになっていた。ダロウェイ夫人がメイドたちとともに家でその準備をしているとき、ピーター・ウォルシュという名の昔の恋人が突然彼女の家を訪れる。インドに長いこと滞在し、定職に就かず放浪していた彼は、クラリッサのパーティ好き、俗物趣味に辟易しながらも、相変わらずのその美しさや彼女の持つ女神性、他の女性とは異なるオーラに再び惹かれ、彼女の前で号泣してしまう。彼はインド滞在時に出会った純朴な女性との結婚のため、現在の妻との離婚調停のためにロンドンへ来ていた。ピーターは結婚に対しての迷いや、ダロウェイ夫人の自分に対する底知れぬ影響、彼女への愛情と憎しみ、過去の出来事や老いについて、ロンドンに戻り思いめぐらせているところなのである。

パーティが開かれる時間が迫るにつれ、ピーター以外の、ダロウェイ夫人の周りの人々の心理も徐々に明らかになっていく。ダロウェイ夫妻の娘エリザベスや、ダロウェイ夫人に対して激しい憎悪と嫉妬を持つエリザベスの乳母、ミス・キルマン、ダロウェイ夫人の夫リチャード・ダロウェイ氏らが次々と自分の気持ちを独白していく。

この物語の終盤で、ダロウェイ夫人はパーティを成功させ、ピーターはパーティが終わるころ、ふと目の前に立っているダロウェイ夫人の姿を見て、改めて彼にとってのダロウェイ夫人が圧倒的な存在感を放つ女性であ

ることを再認識するのである。

ここで、ダロウェイ夫人とピーター両者の人間性と、二人の関係とがよく表われている部分について考えてみたい。

ピーターの心に傷を作り、そして彼の精神的成長の妨げとなる一因に、ダロウェイ夫人に対する失恋が挙げられる。物語の設定から30年さかのぼった当時、仲間たちと共に休暇を過ごすために行ったブアトンで、ピーターはダロウェイ夫人と結婚することはできないと確信する。

1890年代初めの頃の夏、ブアトンという避暑地で友人たちと過ごしていた時、確かにピーター・ウォルシュとクラリッサ（現ダロウェイ夫人）は互いに恋しあっていたのが‘when he was so passionately in love with Clarissa’ (Woolf, 45) という記述からわかる。だが、この熱烈に愛し合っていた二人の関係も、ブアトンでの日々で崩れ去ってしまう。ブアトンでは、ピーターとダロウェイ夫人の内面のみで起こった、一見些細で他人にはわからないが、彼ら二人、特にピーターの中では非常に重大で悲惨な出来事、場面がいくつかあった。そこで、順を追ってピーターがダロウェイ夫人に対して感じた失望とはどんなものだったのかを解説していきたい。

ブアトンでピーターがダロウェイ夫人に対して抱いた失望の感情を代表するのが、‘Death of the soul’ (Woolf, 45) 「魂の死」(ウルフ, 93) である。「魂の死」とは、ピーターがブアトンでのダロウェイ夫人をつぶさに観察して自然と頭の中に浮かんだ言葉である。ブアトンでともにひと夏を過ごした友人たちが、お茶の後に談笑していると、ある一人の女性についての話題が上がる。彼女は近所の地主と結婚し、夫婦でブアトンを訪れていたのだが、彼女はとてもおしゃべりでまくし立てるように話すものだから、ダロウェイ夫人は鸚鵡みたい、と馬鹿にして真似をしたりしていた。するとその場にいたサリー・シートン

という親友から、二人が結婚する前に、彼女に赤ん坊ができていたことをダロウェイ夫人が聞いた後の彼女の反応をみて、ピーターは「本能的」に「魂の死」といったのである。

He could see Clarissa now, turning bright pink; somehow contracting; and saying, "Oh, I shall never be able to speak to her again!" ... but it was her manner that annoyed him; timid; hard; arrogant; unimaginative; prudish. "The death of the soul". He had said that instinctively, ticketing the moment as he used to do- the death of her soul (Woolf, 46).

この場面からわかるように、ピーターはダロウェイ夫人のことを観察することで、内面が手に取るように分かりすぎてしまい、彼女がとる行動ひとつひとつに対して、その裏にある感情を読み取ろうとしてしまうことがわかる。そして、結局彼はダロウェイ夫人の、無意識にその場を壊す発言、態度が「臆病で、冷淡で、傲慢で想像力がなくて、淑女ぶっている」ものとして不愉快に思い、そんな彼女の、感じることに鈍感な魂は死んでいるのだと結論付けた。それが「魂の死」という言葉の出どころではないだろうか。ピーター自身に自分の感情を読み取られまいとするがゆえにしてしまうダロウェイ夫人の行為も、二人の 'this queer power of communicating without words' (Woolf, 46) を介すとピーターの前では意味のない、見え透いたものになってしまうのである。

ダロウェイ夫人の中に「魂の死」が存在することに気づいたピーターは、その後ブアトンでの彼女に対する観察の眼を、ますます客観的なものにしていくことがわかる。先に述べた「言葉なしに心を通じ合うこの奇妙な能力」によって、お互いの心理を読み取ってし

まった彼らは、無言の戦いをする。ピーターはこの一連の流れについて、'It was the way their quarrels often began' (Woolf, 46). といっている。だが、ダロウェイ夫人は 'she'd go on as if nothing had happened' (Woolf, 47) といった態度を見せ、それがピーターにとってさらに彼女を融通のきかない冷酷な女性としてみる要因になってしまう。さらに、彼は彼女のそういった理解しがたい、入り込めない人間性に対して、'queer power of fiddling on one's nerves, turning one's nerves to fiddle strings' (Woolf, 47) と評して、それでもなお彼女を確かに愛しているがゆえに、観察を続けてしまうのである。

すると、彼はある衝撃的な啓示を突然受けることになる。それは、リチャード・ダロウェイと、クラリッサ（現ダロウェイ夫人）が結婚するであろうという啓示である。そしてそれは見事に当たる。ダロウェイ夫人がリチャードと話しているのを見た瞬間から、その啓示は突如として彼の頭に現れたのである。のちに彼は、リチャードに対するダロウェイ夫人の 'a sort of ease in her manner to him; something maternal; something gentle' (Woolf, 47) を発見し、ますますその啓示にとりつかれるようになっていく。これがピーターの受ける啓示である。

ピーターは、このブアトンという地で自分はダロウェイ夫人と結婚することはないだろうという啓示を受け、嫉妬の感情を露わにする。お互いの心理が手にとるようにわかる二人なので、ピーターはあえてダロウェイ夫人の気を損ねさせ、自暴自棄になっていくのである。以下はダロウェイ夫人が何事もなかったような態度でピーターを誰かに紹介しようとする時様子をピーターの目線で観察したものである。

Clarissa came up, with her perfect manners, like a real hostess, and

wanted to introduce him to some one-spoke as if they had never met before, which enraged him.... "The perfect hostess," he said to her, whereupon she winced all over. But he meant her to feel it. He would have done anything to hurt her after seeing her with Dallaway (Woolf, 48).

自分はダロウェイ夫人と結婚できない人間だと悟ると、ピーターは彼女に対して反抗的な態度をとり始める。これは啓示を受ける前から感じていたダロウェイ夫人の「魂の死」の部分、彼女の前で摘発していくことで彼の嫉妬心を昇華させていったのであると考えられる。

ダロウェイ夫人に対しての嫉妬心から、そこにいるみんなが 'They were all gathered together in a conspiracy against him' (Woolf, 48) になり、ますます孤立してしまう。ところが、ここでダロウェイ夫人が彼を連れ戻しに来て、'Come along' (Woolf, 48) と言うことによって、彼の心は一気に打ち解け、仲直りをする事となる。これが、ダロウェイ夫人がピーターに差し伸べる救いの手である。ここで注目したいのは、さんざんダロウェイ夫人の人間性や、社交的本能にたいして皮肉を言っていたピーターが、ダロウェイ夫人の仲直りの言葉によって 'He had never felt so happy in the whole of his life!' (Woolf, 48) という気持ちに変化してしまうほどの、ダロウェイ夫人が発する言葉の影響力である。ここまでをみても、彼がいかにダロウェイ夫人だけを意識し、嫉妬し、そして観察していたかが分かる。

しかし、それでも彼の「彼女はリチャード・ダロウェイと結婚するだろう」という啓示は止むことがなく、ダロウェイ夫人がリチャードをからかう友人に対して感情的になって怒ったことから、ますますそれは確信へと近

づいていく。このダロウェイ夫人の言葉は、ピーター自身に向けて言われたことであり、内心ピーターはダロウェイ夫人にとってただの慰みものなのよ、と言っているに違いないと、彼は勝手に解釈する。そして彼の予想どおり、その後噴水の前で二人が別れ話をする場面になるとダロウェイ夫人はこれが最後だと言って一方的に別れを告げる。

以上が30年前にブアトンで起こった一連の失恋騒動である。このようにみていくと、ピーターとダロウェイ夫人の間にはお互いの気持ちを手取るようにわかってしまうがゆえに生じている心理的障壁が存在しているといえるのではないだろうか。その場にいた女性の悪口に対して過剰に反応した後、ダロウェイ夫人がピーターから非難の目を浴びせかけられるのを恐れてわざと犬のロブにかまってみたり、彼女の社交的態度に嫌気がさした時に「完璧な主人役の女」という皮肉の言葉によってダロウェイ夫人が打ちひしがれることを知っていたり、ダロウェイ夫人がリチャードをからかう友人に対して本気で怒り、その姿から自分ではなくリチャードを愛しているのだということをダロウェイ夫人は伝えたいのだと読み取ってしまったりと、二人はまるで言葉なしに会話をしているかのようである。

そしてその無言の会話を、お互いに無視できないために幾度となく二人の間に心理的衝突が起こるのではないだろうか。このことから考えると、先にも述べた 'this queer power of communicating without words' (Woolf, 46) が、二人の分かれる原因の一つになったのは明らかである。

2. ピーターの理想の女性像

2-1 ピーター・ウォルシュとアニマ

アニマとは、スイスの精神医学者カール・ユングが提唱した心理学用語のひとつであ

る。アニマとは、ラテン語で魂を意味するが、現代ではユングによって、分析心理学における用語として用いられている。夢分析の際に、男性の夢にはある特徴をもつ女性像がしばしば出現することに着目したユングは、その女性像が男性たちの無意識下に存在すると仮定し、それをアニマと名付けたのである。女性の場合のそれはアニムスとなる。男性も女性も、男性らしい、女性らしいといった社会的役割を持つための仮面（ペルソナ）を着けているのだが、実際、無意識下では男性は女性、女性は男性のアニマ（アニムス）を持つことによって人間は内的なバランスをとり、自己実現しているとユングは主張している。

アニマ（アニムス）はポジティブな側面と、ネガティブな面の両方を持っていて、それを可能な限り意識化して人格の統合を図ることが、その自己実現の過程である（河合、340）。

男性の場合、深層心理に抱くアニマは非常にわかりやすい特質をもっている。それは、受容性ととらわれのなさである。ユングによると、女性の心理は男性ほど非合理性を拒まず、一方で男性の心理は合理的でないすべてのものを寄せ付けない傾向をもっているという。だから男性は合理的でないものの代表である無意識層に対してしばしば否定的であり、向き合おうとしないのだ（ユング、79）。男性は、この傾向に相反する、男性の中の女性の心理、いわゆる情緒性や気分といったものが人格化されたアニマを、唯一の「無意識と意識の間を媒介するもの」（ユング、80）としてとらえる。それゆえこのアニマの魅惑にしばしばがんじがらめになってしまうのである。

アニマというのは必ずしもその人にとって理想的な女性を意味するものではない。男性は自分自身が持つ男らしさを自分に投影させるため、自身の持つ女性らしさについては外の女性に対して投影しようと努める（サンフォード、20）ので、このときに投影される

ものがアニマであるとき、投影された相手は過大評価、または過小評価され、本来の人間性を無視されてしまう傾向が極めて強くなってしまうのである。ここで、アニマを外の女性に投影してしまった場合の男性のその後の反応について、さらに見ていきたいと思う。

男性によってアニマの肯定的な側面を投影された女性は、彼にとって極めて好ましい存在となるでしょう。彼女は彼を魅了し、引きつけ、彼の幸福と恍惚の源泉であるように思えます（サンフォード、21）。

これが、男性が女性にアニマを投影したときの初期の段階である。この時点では、男性は女性の肯定的アニマに結びつく側面しか目に入らないため、相手の女性の本質にはあまり意識を向けない。そして、彼は彼女と肉体関係を結ぶことで願望が満たされ、相手をより一層自分の幸福感を満たしてくれる女神的存在に感じる。

次に、自分の本質を見ているのではないと気づいた投影される側の女性が、この状態に疑問を持ち始める。

彼女は、相手の男性が自分を窒息させ始めていることに気づきます。自分がいつでも、すぐさま、彼の要求どおりにならなければ彼が不愉快になるのがわかり、これが二人の関係を重苦しくします（中略）彼は、自分の投影していた女性的イメージを、彼女が実現し、生きてくれることを望んでいたわけで、この願望が必然的に、あるがままの彼女自身と衝突することになったのです（サンフォード、22）。

このように、女性は自分が彼のイメージの中で生かされているのだということに気づく

と、男性の自分への愛が真実ではないと悟る。

第一段階と第二段階を経て、男性は女性に対して投影していたアニマが強ければ強いほど、女性に対して圧力をかけて、彼女が本来の自分自身になろうとするのを妨害し、いつまでも自分の囲いの中に入れて投影を実現させたいという独占欲がはたらく。そして、「彼女が自分自身であろうとすれば、彼は嫉妬し、腹を立て、不機嫌になる」(サンフォード、23)状態になり、二人は仲たがいをすることになる。

自分のアニマを外の女性に投影する男性と、される女性たちは、以上のような三段階の心理変化を経るのが一般的である。ここで、『ダロウェイ夫人』のピーター・ウォルシュに話を戻してみる。

彼の場合、彼はダロウェイ夫人に対して自身の女性的な側面を投影していたことは明らかである。それは、この作品の中で彼が唯一女性的な側面を持つ男性として強調して描かれていること、そしてそんな彼がダロウェイ夫人に対して強い執着(独占欲)を持つように描かれていることからわかる。彼の女性的な側面とは、主に彼の恋愛観についてであるが、

一見、超然としていて余裕を感じさせるのだが、彼がいったん恋に燃えると、分別のかけらもない若い娘に簡単に手玉に取られて翻弄されるところが、また、いかにも世間擦れをしていない初な精神的処女性を窺わせる(伊藤、142)。

というように、未成熟さも兼ね備えている。

また、恋愛のみならず、彼の社会に対する態度も他の男性に比べてきわめて女性的であるといえる。

(ピーターの社会に対する)傍観者の態

度は、もし厭世的なものでなければ、やはり現実世界での自身の無さを証明する逃避傾向であると言わざるを得ないだろう。Peterが「変人で、精霊のような存在で、普通の男とはまるで違う」という印象を人に与えるのは、彼が社会的自我で確固たる自己防御膜を張り巡らすことが未だ出来ていないからである。女性でありながら社会的自我を確立し、パーティを切り盛りする完璧な社交夫人としての名声を築き上げているClarissa(ダロウェイ夫人)とは正しく対照的な存在である。『この年になって家庭も持たず、行くところがどこにもない』から、家庭人としての機能を放棄して夫や父親の役目を降りているし、現に今は失業中の身であるから職業社会人としての社会的機能も一時棚上げしている(伊藤、142)。

というように彼が社会的にアウトサイダーであり、当時の英国社会の男性たちが当たり前担い、女性(ダロウェイ夫人)も持ち始めつつあった社会的役割を放棄していることが、彼が自らを女性的な立場へと追い込むことになった原因のひとつである。

そんなピーターが、自分の女性的側面をどのようにしてダロウェイ夫人に投影しているのか。彼は、先にも述べたようなダロウェイ夫人の完璧な社交夫人的性質に対して、「君は総理大臣の奥さんになって、階段の上立っているのだろう、完璧の主人役の女」(ウルフ、12)というように嫌味を言ったことから分かる通り、ダロウェイ夫人がパーティの主催者として社交の中心に立つような役割を担うことに対して批判的である。これは、先に述べたようなピーターの女性的一面を、ダロウェイ夫人に投影させているにもかかわらず、まったく正反対のことをしている彼女に対する苛立ちともみてとれる。

2-2 ピーターと母親コンプレックス

では、彼の精神が未だ未成熟であるもう一つの要因と考えられる、母親コンプレックスについてみていきたいと思う。この母親コンプレックスがピーターに見られる場面は、彼が、ダロウェイ夫人に再会した後ロンドンの公園のベンチでみる夢の場面である。

The solitary traveler is soon beyond the wood; and there, coming to the door with shaded eyes, possibly to look for his return, with hands raised, with white apron blowing, is an elderly woman who seems (so powerful is this infirmity) to seek, over the desert, a lost son; to search for a rider destroyed; to be the figure of the mother whose sons have been killed in the battles of the world (Woolf, 50). (下線部引用者)

彼の夢の一部を取りあげただけでも、母親コンプレックスを持つピーターの心情が見え隠れしているのが分かる。この夢は、

黄昏の森の中に迷い込んだ孤独な旅人(ピーター)を待ち構えているのは、妖しい女の姿となって次々と現れてくる森の精達である。森が暗闇の無意識世界を、さらに母性的子宮空間を意味し、森の精が未分化な great mother の手の者たちであることは言うまでもない(伊藤、145)。

とあるように、この夢と母親という存在とのつながりはとても強いのである。そしてさらにその母親のアニマをダロウェイ夫人(クラリッサ)に投影しているのである。

その母性的なアニマ像を担わされて、

Peter の精神的な身元保証人になっているのが Clarissa ということになる。(中略) 結局、Peter は無意識にも Clarissa に母性的アニマ像を重ねて、母親代わりの精神的庇護やエロス交流と、男女の性愛関係を同時に彼女に要求していたことになる」(伊藤、145-146)。

2-1 で述べたピーターの内なる異性のアニマの他に、彼はダロウェイ夫人に対して「母性的アニマ像」を投影していたのだということが分かった。その母性的アニマ像に答えられないダロウェイ夫人は、アニマ投影後の第二段階のように、ピーターが自分に対してではなく母親に対してのイメージを自分の中に作り上げていることに気づき、そしてそれと同時に彼がダロウェイ夫人に「男女の性愛関係」まで要求したことで、いよいよ彼女は本当の自分を見てくれないピーターのもとを去っていったのである。

3. 魂の死をめぐるピーターの心理

3-1 「魂の死」が登場する2つのポイント

それでは、ピーターが発する「魂の死」という言葉が、どういう過程で生まれたのかを検証する。そのためにまず、彼が「魂の死」と言ったとき、彼の心理状況や場面はどうだったのかをみていきたいと思う。

1つ目に「魂の死」が登場するのは、1章でも紹介したブアトンの回想中である。

この「魂の死」は一見ダロウェイ夫人に向けられていると思われる。しかし、次の「魂の死」はどうであろうか。

So the elderly nurse knitted over the sleeping baby in Regent's Park. So Peter Walsh snored.

He woke with extreme suddenness, saying to himself, "The death of the

soul.”

“Lord, Lord!” he said to himself out loud, stretching and opening his eyes. “The death of the soul” (Woolf, 45) (下線部引用者)

紹介した順番と実際の作品中とは順番が前後してしまっているが、前者のものを「ダロウェイ夫人の魂の死」、後者を「夢の中の魂の死」として、議論を進めていきたいと思う。

夢の中の「魂の死」という言葉は、ダロウェイ夫人に対して述べられているものではないとは考えられないだろうか。

この議論をする前に、第一章でも少し登場したピーターの夢をより詳しく紹介したいと思う。夢の描写は「意識の流れ」手法のためもあり、かなり叙景的であり、そこにいる登場人物の心理を見極めるのは困難であるが、一人の初老の女が、宿の戸口の前で息子の帰りを待っているかのように立っている。孤独な旅人はまもなく森を抜け、その初老の女が立っているのを見る。彼は女たちが編み物をしながら立っていて、男たちは庭園を掘り返している村通りを進むと、その宿に着く。宿の中にはありふれた日用品や花などがあり、初老の主婦は灯火を受けて輪郭がぼやけ、その瞬間に彼女は崇高なものの象徴となる。

そして、旅人に向かって、「今夜は、もうご用はございませんね、お客様？」と言う。

第1章でも紹介したように、この夢の初老の女が「彼のクラリッサに、ロンドンでやさしくピーターの帰りを待っていて欲しかったという思いが、夢の中で白いエプロンをつけてドアの前でいつまでも帰りを待っていてくれる母親の姿となって現れているのである」(島岡、30)。とするならば、前述したとおり、ピーターは明らかにダロウェイ夫人に彼の理想の母親像を重ね合わせている。さらに次の夢分析をみてほしい。

Despite her seeming benignancy, the landlady shuts it in the cupboard, and makes the curt remark: “There is nothing more to-night, sir?” As we have seen, the figure of a woman has been the savior of Peter’s soul in his dream, and so the sudden rebuff of the woman gives him a terrible shock. (Ukai, 61)

夢の中の「魂の死」発言が、夢で理想の母親像を重ねてみていた女主人がはなった、この「もうご用はございませんね、お客様」という一言によって、ピーターが強烈なショックを受けたために出てきたものであるという仮説を立てると、いったい彼は誰に向かって「魂の死」と叫んだのだろうか。

ここでは、二つの可能性が考えられる。一つ目は夢の中の女主人、ダロウェイ夫人に重ね合わせている存在に対してであり、二つ目は彼自身に対してである。確かに彼はこの夢を見た後、ブアトンでダロウェイ夫人に対して「魂の死」と感じた時の回想に入るので、「夢の中の魂の死」と、「ダロウェイ夫人の魂の死」をリンクさせているのは間違いない。だから一見これは女主人、つまりダロウェイ夫人に対して言っていると思われがちなのだが、しかしこの女主人のどこに「魂の死」を感じさせる箇所があるのか。ここはむしろ、彼女ではなく孤独な旅人、つまりピーター自身に対して「魂の死」と言ったのではないだろうか。

“The death of the soul”, at the moment it is uttered, is nothing but “the death of Peter Walsh’s soul”.... Peter Walsh’s dream is his struggle with what enervates his soul, of which the gnawing memory of Clarissa’s rejection of his love is one example. He makes a counterattack on the

trauma by making the “elderly nurse” his lover and protector; yet even his protector eventually rejects him, and it is his desperation that makes him cry out: “the death of the soul” (Ukai, 48)

鶴飼の論をみても、必ずしもピーターが二つの「魂の死」を同じ対象に向けて言ったとはいえないであろう。母親的アニマ像と恋人像の両方を象徴する存在である女主人に冷たい態度をとられ、擁護者であると信じていた人からの拒絶にショックを受けたピーター自身が、その自分の心理状態を表す言葉として「魂の死」を使ったのではないかと考えられる。

3-2 「魂の死」は何を意味するか

では、これまで何度も出てきた「魂の死」とはそもそも何を意味するのか。この作品を通して、「魂の死」というものが何を表すのかについては、誰の口からも、ピーターの口からさえも語られることはない。だが、ピーターは自分自身の状態を表す言葉として「魂の死」と言ったのだとすれば、それは彼が夢のなかで体験した絶望感だと言えるのではないだろうか。

ピーターは自分の理想の女性から絶望させられることに恐怖を感じている。その主たるものとしてブアトンでの失恋体験が挙げられるが、それだけでなく、まるで透視するかのようにダロウェイ夫人の心理状態を観察し、そこで得た彼女の「魂の死」というレッテルに、自分で暴いたにもかかわらず絶望させられたことも、彼の中では大きなトラウマになったのだ。

先述したとおり、二種類の「魂の死」がピーターのセリフの中に登場するのだが、ブアトンでダロウェイ夫人の「魂の死」を彼が確認した時、ダロウェイ夫人は絶望的な心理状態だったのだろうか。もしそうだとするならば、

このブアトンでの出来事はダロウェイ夫人の目線からももっと描かれるべきだが、彼女目線で語るのは、ピーターをふったこと、「完璧の主人役の女」と言われたことなど、表面的な記述しかない。これを踏まえると絶望していたのはダロウェイ夫人のことではなく、ピーターなのではないだろうかという仮説がたつ。

「彼女の魂の死」というのは、ピーターのフィルターを通してみたダロウェイ夫人を表す際の言葉であり、彼女の人間臭さ、ピーターに対するごまかし、虚勢など、彼のアニマには存在するはずのなかった様々な要素を認めざるを得なくなってしまう。そのアニマに反する要素に対して「魂の死」とレッテル付けることで、ダロウェイ夫人が自分と結婚しなかったことを正当化し、自分に非がないことを内心で主張しているのである。

つまり、「魂の死」はピーターのアニマと現実のダロウェイ夫人との間に生じたずれが引き起こす、彼の中の絶望の叫びなのだと考えられるのである。

4. ピーターの精神的成長

4-1 ピーターと二つ目の「啓示」について

ピーターが受ける啓示には、二種類のものがある。一つ目はブアトンでの思い出の中に登場する、「ダロウェイ夫人とリチャードとの結婚の啓示」で、二つ目は「パーティで受けたピーターの啓示」である。ここでは、この第二の啓示を中心に彼の内面の移り変わりを考察し、彼の精神的成長について議論していきたいと思う。「パーティで受けたピーターの啓示」とは、ピーターがダロウェイ夫人の存在感を感じた時に起こる「恐れ」と「恍惚感」である（小林、145）。そして「これら二つの感情が、『そろっていっしょに』経験される瞬間は、時間を不動化させる」（バシュラール、133）。つまり彼はこの時、相反する二つの感

情を感じ、そのために時間も空間も超えてただそこにいるダロウェイ夫人に感動を覚えている状態なのである。

この第二の啓示を受けるに至ったピーターは、これまでとは違うダロウェイ夫人に対する見方をしていることがわかる。これ以前のピーターは彼女の俗物主義に対しての批判ばかりに目が行きがちで、彼女の外見的美しさや時折見せる彼に対する母性愛にも似た愛情は確かに認めてはいるものの、彼女の根底にある「魂の死」の部分には厳しい目を向けていた。しかし第二の啓示を受けたピーターは、それら一切を取り払って真のダロウェイ夫人の姿を真正面から見据えている。

4-2 ピーターの内面的変化

ではピーター自身はどのように変わったのか。ピーターの内面にはダロウェイ夫人に投影し続けるアニマというものがずっと存在していた。ダロウェイ夫人に俗物的な部分を見てとると、それは自分の中のアニマに結び付かないことから否定し、彼女に対して皮肉を言い続けていた。それが彼の社会的無力さをかばい、正当化する術でもあったことはすでに述べたとおりである。では、ダロウェイ夫人が自分自身の「魂の死」に気づき反省したことで、彼女がピーターの中のアニマに近づき、そのため彼女のことを批判的見方なしに見ることができたのであろうか。もしそうだとすれば、ピーターは精神的な成長を遂げていないばかりか、これまでよりもっとダロウェイ夫人にアニマを投影し、それによってがんじがらめになってしまったという悲観的な終わりを迎えたことになる。つまり、彼がこの時受ける第二の啓示は彼の幻想であり、「自己中心的で感傷的な思い込み」(小林,149)だと解釈できる。しかし、本当にそうなのだろうか。

ピーターは作品序盤から、自分の52歳と言う年齢に対して大きなコンプレックスを感じ

ていた。彼はこの物語の登場人物の中で、自分の年齢を気にせずいつまでたっても好き勝手なことをして暮らしている男という点で、老いに対して無頓着なように感じるが、実はとても気にしているのである。それはこのピーターのせりふによく表れている。“He was not old, or set, or dried in the least” (Woolf, 39).

自分が老いていることを認めることは、同世代のクラリッサの老いも認めることになる。そして、その老いの不安に付随する問題の1つである死への恐怖も、以下のピーターのせりふからわかるだろう。

He thought, She has been ill, ... and the sudden loudness of the final stroke tolled for death that surprised in the midst of life, Clarissa falling where she stood, in her drawing-room. No! No! He cried. She is not rolled down to him, vigorous, unending, his future. (Woolf, 39)

ダロウェイ夫人の死と、自分の老いを重ね合わせてみていることから、彼が自分の分身ともいえるアニマをダロウェイ夫人に重ね合わせていることは明白である。しかし、このような老いや死への恐怖は、彼の中で、確実に変容していったと考えられる。

When one was young, said Peter, one was too much excited to know people. Now that one was old, fifty-two to be precise ... said Peter, one could watch, one could understand, and one did not lose the power of feeling, he said (Woolf, 143).

これは、ピーターがサリーと、パーティの参加者たちをじっくりと観察し、散々その俗

物性に皮肉を言った後に現れたダロウェイ夫人の娘、エリザベスの「池のほとりの百合」(ウルフ、310)のようなたたずまいが心に残って言った言葉である。つまり、ピーターは自分が老いたことによって周囲の人間を知り、感じるようになるようになり、彼らが俗物か、そうでないかを見分けることができるようになったと気づいたのだ。だから、ダロウェイ夫人が4章2節で述べた変化を遂げた後、ピーターの前に現れた彼女は彼の目に全くの別人として映ったのである。

これまでの俗物性を拭い去り、社交辞令で会話しなければならぬ、出世のための人々ではなく、ブアトンの夏を共にすごした旧友たちを優先し、彼らをパーティ会場で探し始めたダロウェイ夫人の姿が、ピーターを「有頂天」にさせ、「ただならぬ興奮で」全身をみたしたのである。

結論

ピーターの変化は、ダロウェイ夫人の「魂の死」に対する自らの気づきがなければありえなかったことである。だから、彼の二回目の啓示が、全くの幻想であったとはいえない。ピーターの「自己中心的で感傷的な思い込み」(小林、149)であるならば、彼がリージェンと公園で見る夢の中でダロウェイ夫人にアニマを投影していることに対して、「魂の死」だと叫びをあげることはないはずである。加えて、これまでのように自分の理想の女性像からはずれた、パーティを開くような社会的地位を築く女性であるダロウェイ夫人をそのパーティ会場で今まさに目の当たりしていても、彼はアニマのフィルターをはずして彼女を見て先に述べたような有頂天を感じているならば、この時彼はアニマから完全に解放されたのではないだろうか考える。

ダロウェイ夫人がピーターによってアニマを投影されることに対して恐怖を抱いていた

にもかかわらず、彼のもとへと向かっていく結末は、確かに彼女が俗物性を取り払うことに成功し、精神的成長できたということを描いているといえる。それに対してピーターは、リージェン公園で夢を見たり、彼女との過去を思い返したりしているうちに自分のアニマを拭い去る。これができるのは、ピーターが「成熟」して、周囲の人間を知ることができるようになった後に、これまでアニマの投影のおかげで本質を見つめることのできなかったダロウェイ夫人に30年の時を経て再会したということで、彼女のありのままを受け入れる体制を整えられたためであり、そして彼は無条件で彼女の存在感に圧倒されるようになったのではないだろうか考える。つまり、ダロウェイ夫人とピーターは、この物語の中の一日という短い時間を通して、互いのことを思い合っているうちに化学変化を起こすかのように精神的成長を遂げ、それぞれの内面に潜む「魂の死」に気づいたのではないだろうか結論付ける。

参考文献

- 伊藤太郎『『ダロウェイ夫人』の心理学的考察-2-愛すべきドン・ファン、ピーター・ウォルシュ』名古屋女子大学編『名古屋女子大学紀要』第36号、1990年、141-149頁
- 河合隼雄『世界大百科事典』平凡社、1988、340頁
- 島岡晃子「Virginia WoolfのMrs. Dallowayにおける神話的女性像—Peterの見る女神—」広島女学院大学大学院、広島女学院大学大学院言語文化研究科編『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第6号、2003年、9-32頁
- 小林克彦「Peter Walshの啓示について—Mrs. Dalloway論」、熊本商科大学編、『熊本商大論集』第33号(1)、1986年、145-158頁
- サミュエルズ、A、B・ショーター、F・プラウト『ユング心理学辞典』濱野清志、垂谷茂弘訳、創元社、1993年
- サンフォード、ジョン・A『見えざる異性：アニマ・アニムスの不思議な力』長田光展訳、創元社、1995年

- 清水雅子「ピーターのナイフを意識するダロウェイ夫人——存在の不安と離人症的心性」『川崎医療福祉学会誌』第8号(2)、1998年、238-247頁
- 萩尾重樹「ユング心理学講義1」鹿兒島国際大学国際文学部編『国際文化学部論集』第6巻、第4号、2006年、375-383頁
- バッシュラール、ガストン・B『神話に見る女性のイニシエーション』杉岡津岐子、小坂和子、谷口節子訳、創元社、1998年
- ヘンドリック、スーザン・S『「恋愛学」講義』齊藤勇監、奥田大三訳、金子書房、2000年
- 森茂起『トラウマの発見』講談社、2005年
- Sakamoto, Masao. 'Virginia Woolf's Artistry in Mrs. Dalloway-Some Problems of Interpretation' 九州大学大学院英語学・英文学研究会編、*Cairn*. No.28、1984年、45-61頁
- Ukai, Nobumitsu. 'Peter Walsh's Dream-On Arbitrariness of Perception in Mrs. Dalloway' 神戸大学近代発行会編『近代』第78号、1995年、45-63頁
- Woolf, Virginia, *Mrs. Dalloway*. Oxford: Blackwell Publishers Ltd, 1996.
- ウルフ、バージニア『ダロウェイ夫人』富田彬訳、角川文庫、1955年